



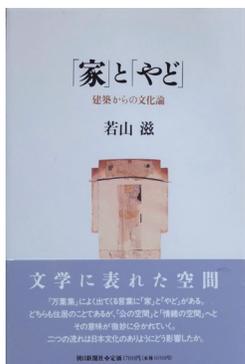
2018.5.17 NO.2 (通算88号)

一般社団法人 自然科学書協会 | 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 | 神保町 101 ヒル 1 階 | TEL 03-5577-6301 | http://www.nspa.or.jp/

● 自然科学の時間 ●

建築からの文化論・文学論

建築家・名古屋工業大学名誉教授 若山 滋



進路を決定的にした2冊の著書

**\*二つの著書**  
これまで、建築の設計・研究とともに、文化論、文学論を執筆することが僕の主な仕事であった。  
どうしてこんなことになったのか。

進路を決定的にしたのは二つの著書である。すなわち『建築へ向かう旅』積み上げる文化・組み立てる文化』（冬樹社）と、『家』と『やど』―建築からの文化論』（朝日新聞社）。その二書を振り返ることによって、僕の人生における思考の変遷を振り返ってみたい。

**\*ヨーロッパ・ヒッチハイク**

紛争の嵐が吹き荒れ、バリケード封鎖の中で大学を卒業した。

そのまま大学院に進んだのだが、設計と研究とどちらの道に進むべきかで大いに迷い、迷いながら哲学や評論をやたらに読んだ。そしてその閉塞感を打ち破ろうとしたのだろう。突然、無計画で無鉄砲な旅に出る。

四ヶ月にわたり、ヨーロッパ各地をヒッチハイクでまわったのだ。

アウトバーンの発達しているドイツを中心に、スイス、オーストリア、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、オランダ、ベルギー、フランス、最後の一月はイギリスのブライトンという街で英語の勉強をした。主としてユースホステルを利用したが、ドライバーの家に泊めてもらったこともあり、駅舎で夜を明かしたこともある。警察に捕まったり、マフィアに追いかけられたり、男色家に狙

われたりしたこともある。皿洗いこそしなかつたが、金もなく、予定もない、放浪の旅であった。ろくな食事を取らなかつたので、体重は落ち、ベルトがゆるくなった。

**\*積み上げる文化と組み立てる文化**  
腹を空かせた犬のように路地裏をウロウロと彷徨いながら、僕はヒシヒシと街の重みを感じていた。

それは建築の石の重みであるとともに歴史の重みである。角が擦れて丸くなった石畳の上を通り過ぎて行った人の数と時間の堆積である。ともすればその重みにつぶされそうになりながら、考えた。ここでは、その都市と建築が石や煉瓦を積み上げてつくられたように、その文化もまた過去から現在へと積み上げられているのではないか。



積み上げる建築（ブラハの大聖堂）

われわれが中学で学ぶ、ユークリッドやピタゴラスやアルキメデスといった数学者は古代ギリシャの人であり、コペルニクスやガリレイやニュートンの発見は彼らの思考の上に乗っている。中世キリスト教のスコラ哲学も、デカルトやカントやヘーゲルの近代哲学も、ソクラテスやプラトンやアリストテレスといった古代哲学の思考の上に乗っている。考えてみれば、マルクス主義者の好きな弁証法というものも、積み上げの論理ではないか。

ヨーロッパでは、都市や建築が積み上げられていくように、その文化も積み上げられていくのだ。

それに対して日本文化は、その建築が木造の組み立て式であるように、組み立て組み替えを繰り返しているように思えた。

過去には中国から来たものを日本流に組み立て組み替え、近年には欧米から来たものを日本流に組み立て組み替えてきた。政治学者の丸山眞男が「日本には思想の葛藤と蓄積がなく、様々な外来思想が同居している」（『日本の思想』）としたように、西洋の思想が長期的、論理的、構築的であるのに対して、日本の思想は短期的、情緒的、雑居的なのだ。ヨーロッパの文化は「積み上げる文化」であり、日本の文化は「組み立てる文化」である。

日本に帰って、設計事務所勤めながら、この体験と思考を『建築へ向かう旅』（冬樹社）という著書として出版した。「積み上げる文化・組み立てる文化」という

サブタイトルをつける。つまり青春の放浪記であると同時に、建築論でもあり文化論でもあった。

幸いなことに、この本はきわめて好評で、ほとんどの新聞と雑誌に書評が掲載され、朝日新聞の「天声人語」にも紹介された。

またちょうどそのころ、雑誌『建築文化』（彰国社）において「風土と建築」というテーマの懸賞論文に応募して、最優秀賞（下出賞）を得た。

幸運が続いて、僕はものを書く人間になった。

### \*壁の文化と屋根の文化

積み上げる建築は「壁」の建築であり、組み立てる建築は「屋根」の建築である。壁とは、石や煉瓦で空間を仕切り人を隔てるものだ。

個人の空間を隔てたものが個室であり、家族の空間を隔てたものがサロン（リビング）であり、市民の空間を隔てたものが広場であり、信仰の空間を隔てたものが教会である。ヨーロッパの都市は、隔てられた空間の集合なのだ。

屋根とは、木を組み立て人をまとめて覆いをはかるものだ。

そこに「家」ができる。障子や襖という紙で仕切られた家の中にはプライバシーが存在しない。そこで個を立てるには家を出る、すなわち家出または出家する必要がある。

実際ヨーロッパの都市は、建築が隣の建築と密着して一つ一つの家という感覚

ではない。イスラム圏はもっとそうで、インドも中国もその傾向がある。同じ建築の内部でも部屋と部屋は煉瓦の壁でしっかりと仕切られているから、そこに完全な個人の空間が成立する。

日本では東京のような大都市でさえ、家のまわりに隙間を空けて、塀で囲って土地を取ろうとする。家の集合は村であり、都市もまた大きな村に過ぎないのだ。個人の論理も、都市の論理も、自治の論理も希薄である。

社会構成の上にも、この「個人の論理」と「家の論理」が反映されているのだ。ヨーロッパの社会は「個人・都市」の集合であるが、日本社会は「家」の集合であり、個人はどの家に所属しているかで認識される。封建時代の「藩」も、現代の「企業」や「省庁」も、その「家」の一形態ではないか。

こういった文化比較の基本となる「積み上げる・組み立てる」あるいは「壁・屋根」というのは、建築の構法である。つまり放浪の旅によって感得した比較文化論が、僕の研究上の専門と結びついたのだ。

今考えれば、無計画で無鉄砲な「建築へ向かう旅」は、結局「人生へ向かう旅」となった。

### \*日本人の二つの住まい

設計事務所から名古屋の大学に赴任して、何か、人のやらない変わったことをやろうと取り組んだのが「文学の中の建築」という研究であった。

大上段に『万葉集』から取りかかると、万葉四五一六首に、もっとも多く登場する建築用語は「家」であり二〇〇首に及び、次が「やど」であり一二〇首に近い。

「家」はもちろん住居を表すのであるが、建築そのものというより、居住の根拠としての場所と空間を包括的に指している。そして「やど」は旅の宿を意味するのではなく、これも住居を表し、むしろこちらの方が住居建築すなわち現代語の「家」に近い。つまり「家」と「やど」は、ほとんど同義語なのだ。

なぜ万葉人は、この二つの言葉を併立したのであろうか。歌の内容を調べてみると、その文脈が異なっていることが分かる。例をあげよう。

「人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり」（大伴旅人 巻三、四五）

大伴旅人が大宰府の勤めを終えて奈良の家に帰ったとき、その過程で妻を失った哀しみを詠む。

「ひさかたの天の露霜おきにけり家なる人も待ち恋ひぬらむ」（坂上郎女 巻四、六五）

「我が屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきの夕かかも」（大伴家持 巻一九、四二九）

庭の竹に風が当たるかすかな音を詠む。旅人の子でもあり編集者でもあった家持の名歌とされる。

「春雨に争ひ兼ねて我が屋前の桜の花

は咲き始めにけり」(未詳 卷一〇、一八六九)

このように、「家」の歌は人を詠み、「やど」の歌は草花を詠むのだ。

「家」は「人の空間」であり、特にそこにいるべき人がいない、不在の哀しみの空間であり、「やど」は「草花の空間」であり、自然の審美的空間である。これは万葉全般にわたって、まことにはつきりした使い分けである。どちらも住まいを表す言葉であるが、古代日本人は「家」と「やど」を、その文脈によって使い分けた。

そして「家」は、家族や家系という人の関係につながる社会的な意味を帯び、「やど」は、そういった社会性を離れた個人的な自然の美意識につながる。

僕はこれが、文学ばかりでなく、日本の建築にとつても、社会にとつても、文



組み立てる建築 (柱離宮書院)

化全般にとつても、重要な事実を示唆しているような気がした。日本人は、文化構造としての、二つの住まいを生ききてきたのだ。

### \*制度の空間・逸脱の空間

ところが不思議なことに、平安時代に成立した『古今和歌集』では、住まいを表す言葉はすべて「やど」となる。

『万葉集』にもっとも多く登場した建築用語である「家」は、わずかに複合語として登場する以外には、まるでミステリーのように消えてしまった。これはどうしたことか。

スコープを引いて大きく考えてみよう。万葉の時代は、日本という国が中国にならつて社会制度を急速に文字化した時代である。すべての土地を国家に帰属させて公地とし、すべての国民を公民とし

口分田を与え、租庸調という税金を課し、律令という法律体系に組み込もうとした時代である。「家」はおのずと、そういった社会制度の単位としての性格を帯びることになる。逆に「やど」は、その社会制度の軀(くびき)から逃れようとする性格を帯びる。つまり「家」は「人の空間」であるとともに「制度の空間」であり、「やど」は「草花の空間」であるとともに「逸脱の空間」なのだ。

そして平安中期、国際的な文化を誇った唐王朝も衰退期に入り、日本は遣唐使を廃止する。その少しあとに成立した『古今和歌集』の「仮名序」は、「仮名と和歌」という、日本独自の文化を定立する宣言

だ。その「和歌」という文化において、王朝の歌人は、中国から来た文字によって成立した律令国家体制の根幹をなす「家」という制度の空間を拒否し、逸脱の空間としての「やど」に美意識の居場所を求めたのではないか。

以後、明治以後のアララギ派にいたるまで、和歌の中に「家」は登場せず、住まいの表現は徹底して「やど」となる。

日本の社会制度は上代から今日まで、すべて「家」という枠組みによつていた。大和朝廷における蘇我と物部の争いも、藤原氏の摂関政治も、源氏と平氏の争いも、南北朝の抗争も、戦国大名の群雄割拠も、徳川政権下の各藩の運営も、赤穂浪士の仇討ちも、井原西鶴が描く商家の勤勉も、明治国家(国という家)における王政復古も、現代企業の終身雇用も、すべて「家」を守り繁栄させるという論理であった。

その日本社会を支配する「家」から逸脱する空間が「やど」であり、「家」とは逆の、あらゆる社会性を離れる意味を背負う。「あはれ、無常、風流、数寄、いき」など、日本文化の美的概念は、すべてこの社会制度を逸脱した漂泊の空間に浮かぶものとなった。

日本文化は、「制度の空間」である「家」と、「逸脱の空間」である「やど」の対立構造の上にとらえられる。

そういった視点から、この国の文学、建築、社会の関係の変遷を論じたのが『家』と『やど』(朝日新聞社)という著書である。この本は、高校国語の教科

書にも採用され、大学入試にもたびたび取り上げられている。以後しばらく、僕の講演には、建築関係者よりも国語関係者が来るようになった。

そんなわけで、高校までは数学少年だった僕が、建築をつうじて、もっとも縁遠い存在の文学を研究し、最近、活字よりネット(ヤフーが運営するニュースサイト「THE PAGE」)に、建築にあまり関係のない「ニュースの文化力」という連載記事を書いている。

考えてみれば、「逸脱に逸脱を重ねる人生」であった。

### 執筆者紹介

若山滋(わかやましげる)  
名古屋工業大学名誉教授  
中京大学・放送大学客員教授  
工学博士・一級建築士  
・略歴

台湾生まれ、東京都出身。東京工業大学大学院博士課程修了後(株)久米設計勤務を経て名古屋工業大学助教授。同学教授、米国カリフォルニア大学パークレイ校客員研究員、米国防科省(現国防総省)客員研究員を経て現職。

主な建築作品  
不二の一字堂、ミヤマー中央農業開発センター、筑波科学万博・政府出展歴史館、東邦ガス知多緑浜工場管理棟、西尾市岩瀬文庫展示棟 など  
・主な著書

『建築へ向かう旅』(冬樹社)、『組み立てる文化』の国(文藝春秋)、『ローマと長安』(講談社現代新書)、『家』と『やど』(朝日新聞社)、『漱石まちをゆく』(彰国社)、『建築家と小説家』(彰国社) など

